



Title	イギリスのサステナブル・ファッション教育の現状と課題について
Author(s)	成実, 弘至
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イギリスのサステナブル・ファッション教育の現状と課題について

成実 弘至 京都女子大学

はじめに

日本のデザイン教育では SDGs への取り組みが急務となっているが、服飾の分野は持続可能性への対応がまったく進んでいない。一方、欧米ではサステナブル・ファッションの教育・普及にいち早く乗り出してきた。日本の現状を改善するためにも、先進的な取り組みをおこなってきたイギリスのサステナブル・デザイン教育について視察調査を敢行した。本研究発表は、2024 年～25 年におこなったイギリス大学教員への聞き取り調査結果をまとめたものである。インタビュー対象は、ロンドン芸術大学構成大学のファッション、ジュエリー、テキスタイルの各コース、附置機関サステナブル・ファッション・センター、またロンドン以外の総合大学デザイン学部にも所属する教員・研究員である。主にサステナブルデザイン教育にかかわる教員を中心にヒアリングしたが、直接担当していない教員にも話を聞いた。

サステナビリティをめぐるイギリスの状況

まずイギリスでは環境問題への関心が高く、多くの市民、とりわけ若者層が重要課題と考えている。NGO、政治家も積極的なので、法制化も進んでいる。これは EU 諸国に見られる特徴だろう。イギリスは EU を離脱したが、EU 圏内でビジネスをするためには厳しい環境基準をクリアしなければならず、ファッション業界にとっても環境配慮は死活問題である。

多くの大学も SDGs を意識し、その実現をミッションとして掲げている。各大学は 5 年間毎に経

営戦略を設定し、目標や重点分野を発表するが、SDGs の達成を入れることは必須となっている。

イギリスではファッション教育の主な担い手は芸術大学、総合大学のデザイン学部であり、教員は研究者としての学術研究の実績が求められる。サステナブル・ファッション研究も 10 年以上続けられており、研究者の数も研究業績も積み上げられてきた。服飾産業で働く技術を教える専門学校が主流の日本との違いであろう。

ロンドン芸術大学のカリキュラム

ロンドン芸術大学は、ロンドン・カレッジ・オブ・ファッション、セントラル・セント・マーチンズ美術大学など 6 大学の連合体であるが、全学で「サステナビリティ／インクルージョン／EDI（平等・多様性・包摂）」の実現を掲げている。

2024 年、全学共通の「気候・人種・社会正義」原則のフレームワークが策定され、教員に各コースの授業に組み込むことが求められた。このフレームワークは、「サステナビリティについての基礎的な知識を教えているか」「学生に批判的な思考を身につけさせているか」などのチェックポイントがあり、教員はそれに準拠してカリキュラムを組織していく。

たとえば、ロンドン・カレッジ・オブ・ファッションのジュエリーコースの教員によると、このフレームワークを受けて、各年次にサステナビリティの授業を設定した。1 年次では素材の再生、再生素材の扱い方、ジュエリーのアフターライフまで考えさせ、2 年次ではサステナブル・プロジェ

クトをおこない、3年次の卒業制作でも環境配慮を考えさせるという。

ロンドン芸術大学の新設コース

ロンドン芸術大学の各構成大学では、近年サステナブル・デザインを教える新しいコースが続々と立ち上げられている。

ロンドン・カレッジ・オブ・ファッションには、ファッション・フューチャーズ (Fashion Futures)、セント・マーチンズには、再生デザイン (Regenerative Design)、バイオデザイン (Bio Design)、マテリアル・フューチャーズ (Material Futures) などの修士コースが開設されている。これらのコースは環境問題、未来の素材を考える内容であり、自然科学分野も学ぶ (英大学ではコースの新設や休廃止は比較的容易である)。

再生デザインコースで学ぶ日本人学生に話を聞いたところ、全授業オンラインで行われるので日本で受講できたという。1年目は基礎を学び、生態学・人類学・デザインの三つの側面を理解し、他コースとの共同課題を経て、自分の住む地域の環境について調査し、メンターやコーチの指導を受けて卒業プロジェクトを仕上げたそうだ。

大学のカリキュラム策定やコース新設の支援をするのがロンドン・カレッジ・オブ・ファッション附置研究所のサステナブル・ファッション・センターである。このセンターには現在 (2025 年) 研究員 20 名がおり、各自のプロジェクトに取り組む。環境問題だけでなく、難民、労働者の人権、地域の産業支援などを専門にする研究員もいる。

他大学の状況

イングランド北部のニューカッスルにあるノーザンブリア大学も大学にサステナビリティ担当のマネージャーがおり、大学運営だけでなく、教員を巻き込む役割を担う。教員は大学の価値観に沿ってカリキュラムの中にサステナビリティを組み込むことが求められる。デザイン学部では、学

部・大学院すべてのコースでカリキュラム改訂を行い、持続可能性を必ず盛り込んでいる。プログラムによっては全モジュールにサステナビリティを組み込む場合、専門の授業を設ける場合がある。

この大学にはファッションデザイン・サステナビリティという修士コースがあり、サステナブル・ファッション専門の教員がいる。社会人が学び直しに来て、卒業後は企業のサステナビリティ担当、コンサルティングの仕事につくという。

イングランド南東部のウィンチェスターにあるサウサンプトン大学ウィンチェスター芸術学校でも、各教員はサステナビリティの問題意識を踏まえて、コース設計や授業をおこなう。サステナビリティを専門とする教員がおり、ファッション・マーケティング&マネジメント学士コースでは、サステナビリティを全授業の文脈的要素として組み込み、課題でも考えさせるという。

ファッションデザインの修士コースでは、学外のゲストを呼んでサステナビリティ・フォーラムを組織し、サステナブル・ファッションのプロジェクトに学生を巻き込み、学生作品の展覧会を開催するなどしている。

現状と課題

このようにイギリスの大学・美術大学ではサステナビリティはもはやアジェンダ (課題設定) からアクション (どう実現するか) のフェーズに移行している。一方、同じ大学でもビジネス、マーケティングの教員は冷淡な反応を示し、情熱のある教員とそうでない教員の間のギャップも見られた。また、SDGs ブームが今後も続くのか、消費者に広がる「サステナブル疲れ」、業界の「グリーンウォッシュ」問題など、懸念材料も少なくない。

イギリスの大学には批判的思考やイノベーションを重視する伝統があるが、現在の流動的な状況の中でサステナブル・ファッション教育をどのように進めることができるのか、ひとつの正念場を迎えているように思われた。